

ほたるぶくろ



句集

ほたるぶくろ

布村松景

春の句

梅が香に城の石垣緩みけり

茅葺の屋根の息づく雪解かな

ゆきげ

春動く野に出て旅の貌となる

かお

ふきのとう

落の臺一つは土に残しけり

父と子の足跡続く春の波

ひがた

春干瀉手に一粒の桜貝

小樽にて

春愁の運河の流れ止まりけり

春の夜や母の形見のラシヤ鋏

春立ちちて釦の穴の緩びけり

春寒や床に落ちたる匙の音

越し方の一里の塚の桜かな

風止みて花に散る間のありにけり

三井寺の鐘に吹かるる落花かな

散る花にぽつりと漏らす独り言

嘯りや登り窯焚く無精髭

攻めに入る窯音しるき春の闇

病室の窓に人影菜種梅雨

盗み見て読めぬカルテや春寒し

ペン先に集まる睡魔春の午後

吊革に体あずけて春の人

露座仏の伏し目がちなり余寒なほ

江ノ電にチエ口抱く乙女春の昼

菜の花に風の眩しき佐保路かな

のどけしや阿羅漢様の笑い眉

憚らぬ猫の恋路や門跡寺

学僧の青きつむりや菜種梅雨

春曉の豆腐屋の角曲がりけり

しにせ

髭文字の老舗看板燕の巣

横向きの子規の面差し春障子

春愁や切れし記憶の糸の先

棟
上
げ
を
遠
望

棟
を
打
つ
槌
音
ず
れ
て
村
の
ど
か

あくび

春の野に欠伸をひとつ捨てて来し

さえずり

囀の天より降る野点かな

のだて

啓蟄や庭にゆるがぬ壺の位置

雲雀鳴く空の高さを思ひけり

花菜風幼馴染を連れて来し

春の野に縄文土器のひとかけら

菜の花や踏切塞ぐ貨車の列

夢殿を廻り再び蝶に逢ふ

春愁や
瞼重たき
伎芸天

悔い残す無爲のひと日や月朧

現世の邪気を浄めて朴の花

ポケットの小銭鳴らして春祭

風車風も一緒に買ひにけり

人声のかたまって帰る宵祭

万華鏡に春の光と遊びけり

菜の花やメモを片手に子の使ひ

幼な子の風に追はれて春の野辺

シヤボン玉路地に生れて路地に消え

竹垣に子の靴干して庭に春

甲冑や花散り急ぐ城下町

春愁や武人埴輪の目のうつろ

鯨鉾の威を張る天守黄砂降る

天守無き城の石垣瑠璃蜥蜴

るりとかげ

春疾風話の継ぎ穂失しなへり

反論をさけて莓をつぶしけり

子雀や工事現場の昼餉時

アンテナに鴉の物見春夕焼

春泥を一気に跳んで子に返る

春曉の軒の雀は饒舌に

春浅し山の駅舎の古時計

側溝の速き流れやつばくらめ

以下続く